



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

2

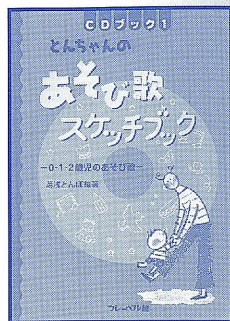
第102巻 第2号 日本幼稚園協会

CDと解説書がセットになったあそび歌の決定版。
楽器から解放されて、子どもたちと思う存分「あそび歌」で
遊びたいという保育者の皆さんに贈ります。

CDブック①

とんちゃんのあそび歌スケッチブック

—0・1・2歳児のあそび歌—



湯浅とんぼ／編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

好評
発売中!



CDブック②

わんちゃんのあそび歌パラダイス

—3・4・5歳児のあそび歌—



犬飼聖二／編著
B5判 48頁+CD1枚
定価：本体2,500円+税

好評
発売中!



子どもとあそび歌を楽しむのに、ピアノ伴奏はあまりふさわしくありません。なぜなら、ピアノに向かっては、子どもの動きが見えないだけでなく、子どもたちと一体になって遊ぶことができないからです。

①巻は、著者が乳幼児のために曲を作り、実際に歌って楽しんだ15曲を収録しています。

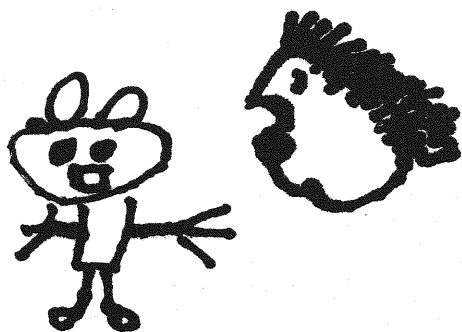
②巻は、著者が全国各地の遊びの講習会で、子どもたちといっしょに歌い踊った作品を中心に15曲収録しました。いずれも、実際の保育現場で長く歌い遊ばれてきた曲ばかりです。

解説書に、楽しいイラストで遊び方を分かりやすく紹介したので参考にしてください。

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第102巻 第2号



幼児の教育 目次

— 第一〇二卷 第二号 —

© 2003
日本幼稚園協会

巻頭言 生活芸術が花開く

— 環境が保有する価値の探求から — 青木 久子 (4)

特集 へくさる

腐ることと慈しむ心 井原 成男 (8)

くさる 腐る 自然さ 鍋島 恵美 (11)

腐るのも大切—目に見えない微生物の働き— 村田 容常 (16)

「生育」と「くさる」の共存へ 小宮山洋夫 (20)

障碍をもつ幼児の保育(7)—この子と出会ったとき—

手を使うこと その二 津守 真・津守 房江 (24)



TO・NI・KARAひろば その六……………嶺村 法子…(35)

生きものの共存の畝間から(10) みんな元気に生きている……………徳野 雅仁…(40)

三木成夫といのちの世界 (五)母なるものへ……………吉増 克實…(42)

私の体験した半世紀前の日本とアメリカの保育……………亀高 京子…(52)

実践の心を学ぶ―堀合文子先生の実践ビデオから―……………関口はつ江…(56)

表紙絵／南塚 直子

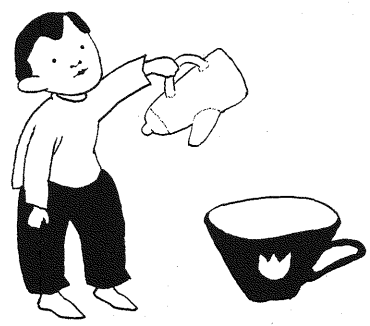
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子





巻頭言

生活芸術が花開く

— 環境が保有する価値の探求から —

青木 久子

感傷的な手紙

蒸し暑い六月のある日、門前に立って子どもを出迎えているいつもの登園風景なのに違和感を感じた。これは何としたことだろう！ 自転車の籠に水着の袋とカバンを入れ、園児を後部荷台に乗せて来る親が急増しているのである。職員室に戻ると手紙を書いて全園児に配布した。教育の共同作業に協力して下さることに感謝する一方、特別な事情がないのに宅配便のごとく自転車の荷台に乗せられて荷物と一緒に下ろされていく子どもたちの育ちはどうなるのだろうか、日本の未来は大丈夫だろうかという「問い」を発したのである。翌日、早速反論が殺到した。「日本の未来などとおおげさ過ぎる」「宅配便に例え



るなど行き過ぎ”、表現が感傷的過ぎる”と言っているのである。この反撃は有り難い。”歩くこと”、”生きること”をテーマに保護者との対話が始まるからである。私は大学兼務のためなかなか親との話し合いの時間がとれないので、一つひとつの意見に手紙を書いた。

あなたのお子様は、自分で必要な持ち物を持って登園することで園という子どもの世界に自分を向ける意志が育つと思いませんか。自分の足で歩いて来ることで家から園までの空間認識を確かなものにすると思いませんか。街の人々の営みや自然の変化を見聞きして社会を学習すると思いませんか。面と向かうのでなく寄り添って親子で歩く時間に子どもに会話のテーマを見つげだす力が育つと思いませんか。歩くことで足腰を強くし生涯自分を支える力がつくと思いませんか等々、自分の足で歩いて心身共に自己拡大することの意味を一緒に考えたのである。翌日から門前に止められる自転車は一つもなくなつた。狭い玄関が広くなり緊急災害時の避難路も確保されてほつとほつとも、歩くことを求めたのは酷なのだろうかと自問自答した。

環境が保有する教育の内容

我が園の創設者小林宗作は「教育は何物にも束縛されない自由なものでなければならぬ」「教育は子どもに本当のことだけを教えなければならない」「子どもの感性を無視して教育を他の目的に利用してはならない」として自由教育を高らかに謳いあげた方である。



しかし教育の嘘が常態化し、人間の精神を自由にすることが取り違えられ、教育が将来の生活安定の手段と化した時代にこの三つの教育理念を實踐するには勇氣がいる。人間が二足歩行を獲得して得た自由によって自己拡大する喜びすら求めにくい時代だからである。

そこで、園長に就任するに当たって環境が保有する価値を教職員や保護者と共に学習することから教育の内容を生み出そうと考えた。園環境の中に学習内容を埋め込み、子どもが対象に深くかわればかわるほど学ぶ意志が強くなり、経験する内容の質が高まる生活を発見していこうとする試みである。池や川、起伏に富んだ山を作り、木を植え、小さな畑を作り草花を栽培した。また砂場や泥場を作り、丸太や材木、竹などの素材を置いた。

子どもが怪我をする、泥で服が汚れるといった初期の保護者の苦情は、やがて環境が保有する価値をどん欲に吸収する子どもの活力によってかき消された。池にはトンボが卵を産みヤゴが孵る、睡蓮やアヤメが咲く、水流で水車が回り落ち葉が流れ、冬には氷が張る、水は侮ると死に至るなど、川と池をめぐる四季の生活が子どもを賢くした。丸太はベンチに、汽車に、棚に、橋にと多目的に活用され、戸外に遊びの拠点が出来ることでごっこが盛んになり、創造性や運動能力が高まった。目当てをもち自力で木に登る経験は子どももの視座を変え伸びやかさを生みだした。虫や野鳥が好む樹木や果実を知り生態を知ることから人間との関係も感じた。植物の中にある毒性や酸性を発見しながら色水を作り紙を漉き、それを活用する人間の知恵や植物の不思議も学んだ。つまり、手間のかかる環境づ



くりの中から教育内容が豊かに生み出されてきたのである。

生活芸術の花が開く

こうしてあの自転車論争から二年半がたった。今、環境に深くかわる子どもたちになさな芸術家・表現者としての意志が感じられる。自然に歌が湧き出ていつのまにか声が重なり音楽の場ができる、棒や葉や草などの自然物を使って庭いっばいに造形する、画板をもつて絵を描きに行くと一時間以上没頭している、泥や砂のモチーフでギャラリが開かれる、ミュージカルも創作されそこに熱中するなど、子どもは表現したくてたまらない存在となっているのである。生活は芸術であった古の人々の暮らしに少し近づけたようなうれしい風景である。

環境によって嘘のない本物との出会いをもたらし、本物の厳しさによって自己を陶冶し、自学自動の活力を湧かせて自由感を子どもに提供しようとする私の小さな試みは、日々の教育作用を根本的に問い直す機会を生みだしたように思う。子どもが没頭する遊びの面白さは、教師の保育探求の面白さでもあり、保護者の子育ての面白さ、自信につながるものとなっていったからである。しかし、いつまでこの試みが続くかは定かでない。己への問いを忘れた時、あるいは問いがエゴに陥った時、再びわが園の生活芸術の花は枯れてしまうと自戒しているところである。

(国立音楽大学)



特集 へくさるく

腐ることと慈しむ心

井原 成男



くさるという字を辞書でひいてみた。まず否定的な意味ばかりで、ろくな意味がない。どうしてこんな題を与えられたのかと編集部をうらみ、くさってしまった。しかし、臨床の仕事はたいいてい、気持ちが悪くさってしまつて、やつて来るのではないか。晴れ晴れとしてやつて来る人などいない。そこからが勝負の世界なのである。

思春期やせ症の子がやつて来た。優等生で、自分を人に合わせることで生きてきた。やせは、この子のからだが生じた、初めてのワガママだった。カウンセリングをして心が緩くなった時に示した、少しだらしなくなつた我が子の態度を見て、この子の父親は、「腐つたミカン早く捨てないと全体が腐る」と言い放つた。この一言がとても印象に残つて

いる。やがて分つたのは、この父親自身、これまで実母に逆らったことがなく、自分の腐った部分を捨てて生きてきた人であったということだった。

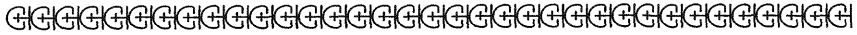
私は、ミカン箱と違って人間の心には、腐ったものを入れておく容器が必要だと思う。優しい気持ちからではない。人間の心は、腐った部分を捨ててしまつたら、不自由だからである。自分の腐った心を許せなくなるし、また人の腐った心を許せなくなる。そういうことは、生きていくうえでとても不自由なことであり、不便なことなのである。

ミカン箱の例えは面白い。心は箱に似ている。こんな考え方があふ。生まれたての赤ちゃんは、自分の腐った心を母親にぶつけて泣く。母親は、しばらくその腐った心を自分の心の中に置いておく、そのことで、赤ちゃんの腐った心は少しだけ毒消しされて、戻って来る。赤ちゃんは自分の心を信頼するようになる。これはおとぎ話かもしれない。でもとてもいい話である。

腐れ縁という言い方がある。これも辞書には改善しようとしても改善できない、よくない関係と書いてある。私は腐れ縁をそのようには考えていなかった。人間は駄目になつてもなかなか離れられない。つまり見捨てないし、見捨てられないこととして取つていたのである。

臨床をしていく上で私の好きな言葉に、存在の連続性というのがある。イギリスの分析医ウィニコットの言葉で、英語で、continuity of beingという。ずっと続いていくという感覚である。よいから続くのではない。腐れていても続くという、その感覚が好きなのである。その感覚に頼つてるといってもいい。

子どもを心身症に追い込んだ親を責めることはたやすい。育児に失敗した親を責めることはたやすい。やがて子どもは親を責めるにいたり、親はそれに反発して、らちがあかない。しかし、私は思うのである。そんなグチャグチャを演じながら、親子で



あることを解消した人はいなかった。腐れながらも関係は続くのである。いや、関係とはどこかで腐れているものなのかも知れない。批判は離れてこそできるものであり、当事者のものではない。

食べ物の話を思い出した。料理法は、焼く、煮る、炒めるの三つかと思っていたら、レビストローズという人が腐るということも料理法の一つに数えていた。はじめはピンとこなかったが、チーズがそうであり、納豆やクサヤもそうである。納豆が駄目な人は多いし、クサヤに至っては、私も最近までだめだった。しかし、慣れれば美味しい。あのウンコのような匂いが、堪らなく懐しいのである。思えば母親は、子どものウンチを見て、「よく出たね、どっさり出たね」と褒める。その思い出は、誰にとっても、そんなに遠い昔のことではなかったはずである。ウンチは、人が嫌うほど汚いものではない。試しに、自分が育てている子どものウンチは不思議と汚くないものである。自分の子どものもの

は、どこかで自分と連続していて、異和感が少ないのであろう。腐ったものを排除するのはそれが腐っているからではなく、心が異和感を感じているからなのである。クサヤを受け入れたのは、それが美味しいものとして心に同化した時であつたはずである。

新鮮なものはやがて古びて腐っていく。それが自然のプロセスである。新鮮さをいつまでも保とうという望みは、どこか不自然である。腐らないものは、もはや新鮮でもない。ものは腐るからこそ、一瞬の輝く美味しさがある。それを匂というのである。人間も同じである。いつまでも若さを保つというのは不自然である。同じように、心にも匂がある。それは昔流の言い方でいうと、「一期一会」と



いうことである。あの感動を再びというのはない方がいい。それが最後という覚悟がその人を大切にす
る心を育てるのである。

新鮮なものはやがて腐り、減びていく。そのすべ

てのプロセスを抜かすことなく見つめることが、人
を慈しむということであり、臨床の心なのではない
かと思う。

(お茶の水女子大学)

くさる 腐る 自然さ

鍋島 恵美

久しぶりに巡ってきた三歳児との生活。家庭の育
児力低下が心配され、おとなも子どもも群れて遊ぶ
ことが少なくなってきました。住まいの環境も美し

く整い、動植物を家庭内で育てることにも抵抗のあ
る人も増えています。何もかもさらつときれいに
なってきたように思います。



育てる くさる

二〇〇〇年四月から出会った三歳児の生活は、「家庭との連携」にこだわりました。お母さんたちが、家庭で大事にしてきたことを引き継いで幼稚園でもしていこうと考えました。「お話をよく聞いてあげました」「おしっこがまだ間に合いません」「絵本が好きで読んできました」「公園で一緒に遊んでいます」とか「うがい、手洗いは必ずしてきました」「粘土遊びの時はスモックを着せてからにします」と、お母さんたちからの話はいろいろです。そして、「だから先生もそのようにしてください」と要望がついています。「いいですよ。一緒にやってみましょう」と、保育者も受けとめていきました。

六月、入梅を迎える前に、夏野菜の苗（スイカ・オクラ・トマト・キュウリ・ナス・トウモロコシ・ミニトマト・ピーマン）を用意して、二組の親子で一つの苗を選び育てることにしました。こどもより

も、お母さんたちが育てることに一喜一憂していききました。「先生、花が咲きました。ピーマンの花つて可愛いですね」「オクラがこんな風にできるなんて知らなかった」「スイカは、小さいときからシマシマ（模様）なんですね。食べるのが楽しみです。Yさんからできたら味見させてねって今から予約付きです」等々。家庭でも気軽にできるように袋栽培にしました。その袋の前が、野菜育て、子育て談義に花の咲く場になっていきました。

蔓性の野菜には、頃合いを見て支柱を立ててやる必要があります。一組のおとな同士の協力作業です。「いつする?」「〇日にしよー」「わかった」とか、「何時にしましょうか?」「うちはいつでも良いですよ」とか、それぞれの会話の口調から関係を察することができると嬉しい光景です。

そんななか、SさんとOさんのくさった顔。「どうしたの?」と尋ねると、「せっかく赤くなるのを楽しみにしていたのに、ほら」と、Sさんが指さし



おいしかったやろなあ」。その子どもの声に我に返ったおとなたち。「つつかれたところはやめて、後は食べられるでしょう」。「そうですね」と、Yさんがもらって帰ることになりました。翌日の朝「先生、おいしかったですよ。へたは浅漬けにして食べました。子どももおいしいおいしいって食べましたよ。ごちそうさまでした」。よかった！

腐った お化け

九月。大きいお化けカボチャの収穫。保育室の真ん中に置いておくと、ドカドカ子どもたちが群れてきて、「これ何?」「おおきい!」と、騒ぎ出しました。「これ知ってる? お化けカボチャって言うのよ! お化けのか・ほ・ちゃ」と、ちよつと凄んで話すと、「キヤー」とののり。そののりにまたのっかって「夜になるとね」と続けると、ますますこともたちの表情が動き出し、「ポカーン ポカーンってね」と続けるごとに息をのんで聞き、「動き出す

んだよ」と話すと、またまたSちゃんが、「キヤー」。「そして動き出すの」というと、またまた「キヤー」。Sちゃんが「夜になると」と、その続きをもう一度聞きたいらしく、「動き出すの」「キヤー」、「夜になると」「キヤー」という遊びになつておもしろがっていると、M男が本棚から、「これと一緒にや!」と、一冊の絵本（チャイルドブックぼう7）を持ってきました。

それは、七月に読んだ月刊絵本で、『おばけなんてなんてないさ（歌絵本）』だったのです。その中の見開きページの「おばけのくにつて こんなく!」にお化けカボチャがいるのです。そのページを開けて、「な! これと一緒にや」と。みんなは、「そう そう」と、のぞき込んでいます。すると、M君、何を思ったのかお化けカボチャめがけてポカーンと一発! わたしは、「あつ! お化けカボチャ叩くなんて、M君の手消えてなくなるよ」と、脅してみました。すると「そんなことないわ」といいな



野菜が腐り土に帰る。人の気持ちがあくさり立ち直る。これは、当たり前のごく自然な摂理なのでしようが、それがしにくい時代になっているのではない

でしようか。

(京都教育大学附属幼稚園)

腐るのも大切

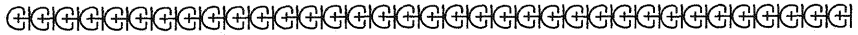
— 目に見えない微生物の働き —

村田 容常

目に見えない微生物

私たちの世界には目に見えない微生物が一緒に生きています。微生物とは肉眼では見えないが顕微鏡レベルで見える生物のことである。私たちを取りまく

空気中や土の中には無数の微生物がいる。土一グラム中には十億個もの微生物がいて言われている。食品が腐るのはこの微生物のせいである。結核や赤痢などの恐ろしい感染症を起こすのも微生物(病原細菌)だし、食中毒を引き起こすO157や黄色ブ



かったら、地球の物質循環が止まってしまふ。つまり、次の生物が生きる糧がなくなることになる。腐るといふことはこのように重要なことである。

腐ると大変

一方、私たちの身のまわりで腐るといふことはどういふことだろうか。魚が腐る、肉が腐る、といった具合に大事な食物が食べられなくなる状態である。これも微生物による分解の一部である。魚や肉に微生物が増えると、臭くなる、どろつとしてくるという変化が現れる。これ自体は体に悪いわけではないが、このような時、分解性の微生物と一緒に病原性の微生物（人に病気や食中毒を引き起こす微生物）が増えている可能性が高くなる。よって、経験的にいつも食べている食物と比較して、変なにおいのするもの、すっぱいもの、色が変わったもの、どろつとしたものなどは腐ったものとして食べないことになる。

おいしい食品をつくる微生物

ところで世界には色々な文化があり、また様々な食品がある。伝統的に東日本の日本人が食べる納豆を見てみよう。大豆を煮豆にしたものに納豆菌を繁殖させ発酵させたものが納豆である。もとの煮豆とはずいぶん違う。においも違えば、ねばねばがあり、どろつとしている。ふだん煮豆しか食べない人がこれを見て「腐っている」と言ってもおかしくはない。においが変わり、外観が変わり、微生物が増殖したのである。幸い正常に納豆菌が増殖するとき病原菌は増殖できない。よって、見た目やにおいはどうであれ、納豆は安全な食品である。経験的にいったん安全だということがわかれば、このにおい、この外観は、納豆という食品の特徴の一つとなり、逆においしさの重要な要素になる。不思議なものである。

このように人に役立つように微生物が働く、増殖



「生育」と「くさる」の共存へ

小宮山 洋夫

森の中では、様々な樹木が葉を落としている。地表に堆積した落ち葉は、ミミズ、ムカデ、ハサミムシなどの小動物やバクテリアによって、食べられ、分解され、形を失っていく。けれども消失したわけではない。無機化し、土と化し、原初の世界へ戻っていく。

そして、再び、植物の根によって吸収され、茎、

枝、葉、花など、形あるものに変身していく。

この形を失う分解過程は、「くさる」といいかえてもよいだろう。「くさる」とは、形を失い、安定した無機的世界へ還っていくことだ。

落ち葉と違って、水分の多い野菜の実など強い匂いを発する嫌気性の「腐敗」はまさに「くさる」そのものだが、形を失う「分解過程」に包含される。

畑では、一生を終え、枯死した野菜は、落ち葉と同じように、自然の働きの中で、形を失い、「くさって」いき、土に戻る。

畑で生育する植物は、野菜だけではない。人が攪乱する場を好んで、住処とする、さまざまな草たちがいる。野菜を育てることは、草を招き入れ、生かすことでもある。さらにそれらと親しい間柄の、バクテリアや虫たちも。

早春、身をちぢめ冬を越したホトケノザ、オオイヌフグリ、ナズナが、小さく可憐な花をつける。春が深まると、カタバミ、カラスノエンドウ、ツユクサ、アカザ、スベリヒユなど、色とりどりの花を開く。

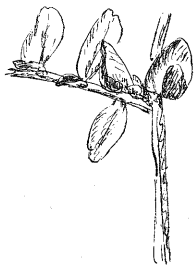
畑の草は、種まきの前後は、ていねいに取り除く。けれども野菜が大株に生長すれば、草取りは、野菜が日陰にならない程度でよい。

畑の夏の草の主役は、メヒシバ、オヒシバ、エノコログサなど、背を高く伸ばすイネ科植物だ。これらの草は、夏野菜の根の張りをよくし、株元の乾燥を防ぐ、自然が提供する優れた素材なのである。

自然の森や草原の植物は、病気になることはないという。それは多種多様な種が共生して、互いに生を健康に支え合う複雑で安定した関係が成立しているからだ。

畑は、単一の作物をつくることで、環境は単純なものになる。それで、病の温床になりやすい。

畑でのさまざまな草の生育は、自然の修復を意味する。畑の環境を複雑なものにして、病を追放す



カラスノエンドウ



る。

刈り取られたり、枯死した草は、畦道や原っぱの草を含め、森の落ち葉や、取り残された野菜とともに「くさる」ことで、原初の状態に復帰して、土となり、肥料となる。そして、畑を豊かにして、次代の生命の生育はぐくむ。

畑の中では、野菜や草が生育するとともに、「くさって」いく。「生育」と「くさる」が、共時的に共存している。それが健康で永続的な畑の姿なのだ。私たちは畑の草を、「雑草」と呼んではならない。

「雑草」の呼称の起源は、さほど古くはないだろう。それは、近代、自由と平等の理念のもとに、人間の平均像が形成され、そこから外れた者に対する差別の誕生と、時をともにしているにちがいない。害虫、益虫の分類の虚しさを、すでに、ファールブル



メヒシバ (左)
エノコログサ (右)

は指摘している。

徹底的な除草は、畑から「くさる」過程を追放するものだ。そこには、ただ、「生育」≡「生産」だけが、熱病のように、追求される。

「くさる」が消えた畑には、他の場所で工業的につくられた化学肥料が投入される。そのような畑では、「循環」が切断されている。ただ、直線的に、ひたすら前へ突き進んでいく。「死」が、「生」にながっていない。



障害をもつ幼児の保育(7)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

手を使うこと その二

手を使い始めたドラマ

F 前回の最後に津守真が「どこまでもその子の感覚を尊重し、それを表現できるようにすることが大切です」と言っていました。それをもちと深めたいと考えて手が表現するものを今回話し合うことにしました。

M 私は保育の中で子どもが身体で表現しているものが

何かということを見ていきたいと思っています。手が子どもの心の中にあるものを表現していることがしばしばあることを保育の中で気が付いてきました。

F 以前から『表現と理解』ということをよく話しているけれど思うのですが。

M それは私の保育の実践にあたっての非常に重要な視点だったんです。心の表現であると考えたときに、この

行動はそのときのどういう子どもの心を表しているのか
ということを私はいつも考えていました。あるときひと
りの子どもが指を小さく動かして、まあ、こういう指先
の動きというのは言葉で説明するのが非常に難しいのだ
けれども、斜面をすべり降りるかのような、そんな動作
を指先で示しているときがありました。で、そのときに
F先生（註『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）の中に

この時の事は描かれています。そこにF先生としたの
でその時の名残でも話の中でF先生と語られまし
た）がビニールテープをもってきました。その場面を私
は忘れることができないんです。F先生はビニールテ
ープを子どもの肩の高さぐらいのところから、スウツとこ
う伸ばして斜面にして、床にそれを貼り付けました。あ
なた、そのときのこと話しますか？

F この子は歩けるけれども自分では歩かずに、自分の
大事な宝物を自分が持ったままお母さんに抱かれてい
て、何から何までお母さんにやってもらっていて、自分

の手はほとんど使わない子だったんです。だから、何で
こんなに手を使わないの？ どうしてお母さんはそんな
にやってあげちゃうの？ ということがとても保育の中
で私の心にひっかかっていたんです。そのときその子が
前日に斜面を滑り降りる他の子どもを見上げていた姿を
覚えていたので、その子が人差し指と中指で歩くような
姿をしたとき、「あ、この子も斜面を滑り降りたい気持
ちがあるのかな」と思ってビニールテープで斜面を作っ
てあげた。その手のわずかな動きに対して私が心を動か
されて、こんなのを作ったらこの子はどう展開させるだ
ろうかって、そんな気持ちでやっただけです。そしてそ
の子はどうしたんです。あなたが注目したほど私
は結果を考えていませんでした。

M 私はあのときに、あの子が人差し指と中指を交互に
動かして、ビニールテープをじつと見つめていた光景
を、今になってもはっきり覚えています。そして指先で
斜面を降りる動作をしたんです。その日は、そのビニ

ルテープを、家まで持って帰ったんです。

F あの子はベタベタするものは嫌いだったんですね。

だからもしかしたらビニールテープのベタベタがあの子の拒否反応にあったかもしれないけれど、そうではなくて、私のやったことを受け取って楽しくその日を過ごすことができた。

M その次の日か、あるいは更に次の次の日かにも、もう一つ私が忘れることができないことは、手をこう握ってこぶしのようにして、その指と指の間から親指の先をチョロツとこう出していたことなんです。

F あの子はかなり来初めからそういう手をしていましたよ。初めはそんなに気にならなかつたけれども、「手は使わないでぎゅっと握ってしまっている」と思ってたに注目したときに指の間から親指がチョロツと顔を出している。それは自分を隠している臆病な動物がちよつと外をのぞいているような姿にも見えたし、また大地の中から新しい芽が萌え出るときのようにも見えたのです。

だから、この子には自分自身というものがいま芽生え始めるようで、この子のこれからに希望を持っていたんです。保育の中でそれがどう展開するかは分からないけれども、色々働きかけていいと思っていました。繊細さもあるけれどあまり遠慮し過ぎないで、周りを整えてあげよう。それをこの子は拒否しないだろうと私は思ったんです。

M それからしばらく後のことだと思っただけれど、この子が手を紙の上に乗せてクレヨンで手をなぞっていたことがありました。それはお母さんが「こんなことしたら」なんて言って最初やっつたと思うんだけど、それをF先生がはさみで切り抜いたんですね。そうしたらその子はとっても嬉しそうにそれを眺めていた。F先生はそれを更に袖口につけてあげて、そしたら彼はその手が取れると自分で持って、今度はわざと自分で落として、またF先生がつけてあげると喜んで見ていて、またそれが取れるとそれをわざと自分で落としてというように、画

用紙の手を自分で操作して手から離したりまた手に持ったりということを繰り返していた。そのころからその子はご飯も自分の手で食べるようになったり、自分の手を使うことがとつても顕著に出てきたような気がします。

手の表現するものと保育

F 私はそのF先生なわけだけでも、F先生としていうならば、確かにその場面は記憶しているけれども特別なこととしてやったわけじゃないんです。自分の手をお母さんに型どつてもらっていた、それを切り抜いたらもつと手らしくなるだろうし、それを上着の袖口につけてあげたらもう一本手ができるじゃないかという、いたずら心というか一步踏み込んだ気持ちでつけてあげたのです。でもそれは嫌がられる可能性もあるわけだし、そんなことをする私自身が、嫌われる可能性もある。でも私がこの子には、ちよつと一步踏み込んで大丈夫だと思って思えたのは一緒にその場を共有している保育者の直感

のようなものかと思います。この子にはなにか生命力があるつて私は思ったんですね。

M 私はそれがとつても面白くてね、その子はその紙の手を手を持って、それからかなり長い時間遊びました。手で遊ぶつていうことが、あたかも自分の手を使うつていうことと重なり合つてね、それまでこの子は自分の手を使うことが非常に少なかったからそれでこの切り抜いた手を自分の手で遊ぶつていうのは、とても面白い保育だと思つた。

F そう言われると嬉しいけれども、それより私は、言葉と話さないし、表情も少ない子どもの中からこぼれ出した表現が手だということを、私の意識に上らせて考えることができたのです。手はうそをつかないような気がするの。表情はね、うそがつけるんですよ。悲しくても笑うとか、大人もやることだけでも、手はうそをつかないから、全身で触れている保育者は手が語つていることに敏感になることが大切なのだと気がついたので。

M いま手のことに焦点を当てているけれど、開くようになったのは手だけのことじゃなくて全身のことだということでした。そのころこの子は手というよりは全身でホールの中を走りまわりました。音楽に合わせて実習生や他の先生も一緒に走りまわることがとても楽しくなっていました。私も一緒にピアノを弾いたりしましたが、この子は本当に楽しそうに口をあけて笑って、体が開いていったような気がします。で、その中の一つがこの手に、象徴的に表されているのではないのでしょうか。

小さな動きを見るということで話が進んでいるんだけど、これは保育全体の中では走りまわったり笑ったり楽しんだり、そういうことの中で行われていて、保育の中でいつも手とか指先を見逃さないように気を付けて見ることが、次の展開のきっかけになることがあると考えられるのです。

F 話しているうちに、手は無意識の言葉を語っているのだから、いま気付かされました。この子のお母さんは

幼児期にこの子の代わりとなって尽くして、ちょっとやり過ぎかとも初めは思うくらいやっていたけれども、そのことがまた次への展開を引き出したんですね。きっとこの子の中にお母さんによって育てられた生命力が花開くときが用意されていたのだと思うのです。

手が空回りする子どもの傍らで……

おとなは空回りを踏みとどまって

F 別のひとりの子どもの話になりますが、お母さんが私に対して、「この子はこんなこともできない、あんなこともできない」って子どものことを言っているそばで、その子は、手をまるでリスみたいに両手をクルクルクルクル「イーとー巻き巻き」みたいに動かすんです。あなただがそれを「手が空回りしている」って言われたけれど



ね、大人の期待に添い得ないときの子どもの手の動きって、大人のはそのようになるのでしょうか？

M いまの子がね、「いーとー巻き巻き」の遊び歌のように手をクルクル回しているのをお母さんはあんまり喜ばなかったんですね。変なことをするって言って。

僕はそれを見ていて、変なこととは考えられなかった。その子の手はなにかをしつかりと握るんでもないし、掴むんでもないし、その手で何かをするのでもなく、何かをしたいんだけれども空回りしているように見えた。それがシャボン玉遊びというところに気持ちが決まったときに、もう手のクルクル回す動きがなくなって、シャボン玉を膨らましてはこわれ、膨らましてはこわれ、こわれては膨らまずということをやって、とても面白く遊んだんだと思いますね。お母さんはそのことに気が付かなかったし、子どもにとって大切なこととは思わなかった。お母さんが変なことというふう考えたときに、その子のまわりでお母さん自身が空回りしているようなそ

んな印象を受けますね。

F でもね、そういう気持ちになるのも分かるような気がするのです。お母さんだけじゃなくて保育者だって、あの子はあるな事としていて、言いたくなりま

すよ。

その時、私もシャボン玉を室内でやって、風のない部屋の中のじゅうたんの上に落ちたのがなかなか割れないのを、あの子がじーっと割れるまで見ている、そのながーい時間その子は全く手なんて回すことをしてない。シャボン玉っていうのは息を吸ったり吐いたりするだけで、美しいシャボン玉ができて、そうやって存在するところが肯定されたっていうふうには、私に見えませんでした。そこでやっとこの子の手の空回りは終わったんだなって思いました。

M その子の手の空回りを、変なことをしてるとして保育者が見なくなるときに、保育者自身もまた自分が空回りをしてるときがあるっていうことに気づくときじやな

いかと思います。そのことに気づくと子どもの手の動きも変なというふうには見えなくなつて、なんて言うんでしょうね……。

F 保育者も親も気になる変な行動を、今日はやらなかった。今日はやったなんていうふうには見ていなくてね、やらないとね。もう忘れてしまうの。

M ああ、そう、本当。

F そして振り返つてみてね、「あれ、いつの間にやめたの」というように気が付く。だから何月何日にやめたなんて特定できない。それが親でもあり保育者でもあるんじゃないかしら。

M つまり保育者も自分が空回りすることがあるけれど、そのことをそんなにはつきり意識には上らせない。保育者は体の中で気が付いても、それは忘れてしまつて次に進んでいる。だから私は、いつも子どもも大人も上向きに前進するようなそういう生き方をするつていうことが、保育のとても大事なことなんじゃないかなと思う

のですよ。

F 自分が否定されたと感じている子どもの中には、とても変わった複雑な行動をする子もいますが、それについては保育者や親はどうしたらいいのでしょうか。

M 複雑なと言われたその最中にもね、保育者は自分の中の子どもや親を否定したくなる心を、ちよつとストツプさせて、自分ももう一つ上向きにその子と一緒にその瞬間を過ごそうとする。大変細かな話だけでも、その細かなところに保育者の一番の本領があるのじゃないか。

F そうですね。保育者は子どものことも親のことも見ている。でも子どものことは誰もが愛しているから、どちらかっていうと、親に対してきつくなるところが難しいところなんです。

M 本当にそれは保育の最中のね、ごく小さなきつかけのところですよ。この親だから子どもがこうなる、というふうな考えの轍にはまらないで、ちよつと踏みとどまっ

て自分もそのときを、さらっと明るく過ごそうとする。それが保育つていうもんじゃないかしら。

自分の手を砂に埋める……悲痛な表現から遊びへ

F 複雑な表現について、あなたが最前線ですらつしゃつたとき、記憶に残っていることは何ですか。

M すぐにそれで思い出すのは手を砂の中にうずめた子どものことです。その子は自分で言葉で表現する子どもじゃなかった。ある日、私と一緒に公園に行ったことです。木々の間を風が吹いて、小鳥がさえずつていて、とても素敵なとなりの公園なんです。そこで自然の中で自然と一体になってその子はとてもいい時間を一時間ぐらい過ごしました。そのときに、ちょうどどこかの幼稚園帰りのお母さんと子どもが十人ぐらいもその場所に来て、そして色々おしゃべりを始めました。うちの子はこれだけ字が書けるようになったとか、うちの子はこんなことやつた、あんなことやつたというお母さんたち

の自慢話だったんですね。その子はそれをずつと聞いていて、突然さつとそこから駆け出して立ち去りました。そしてこぶしで自分の頭を何回も何回もたたき始めました。それで私はその子に寄り添つて、公園の静けさの中で、「あなたは言葉は話さなければいけません、とつてもいろんなことを考えていて、あなたはとても素敵ですよ」つて話しました。

そしてその子は自分の手を砂のなかに突つ込んでその手に砂をいっぱいかけた。両手をうずめたんです。で、私が一緒にその砂の中に手を突つ込みました。指先が子どもの指先とふつと触つて、その子は私の指先をちよつと触ることが嬉しくて、そうやつている間にその子はとても穏やかになつてにこつと笑いました。私はそのときにその子の手の指先を、いとおしく思いました。この指先にこの子が、なんていうか社会の中で自分ができない、やれない、そして他人から変に思われているという、そういう思ひになったときに、自分が悪いんだ、

そんな思いになったとき、最初は自分で頭を殴ってただけけれど、それから次には手を人の目から見えないようにして、いわば恥ずかしい自分を土の中にうずめてしまったような、私はそんなふうに思ったんです。それでその子と一緒に私も手を入れたときに、その子はその思いを分かってもらったっていう気がしたのじゃないかしら。それはそのとき一回だけじゃなくて何回もそういうときがあったんです。

F その子の中にある悲しさと上向きに生きようとするものが、伝わってきますね。

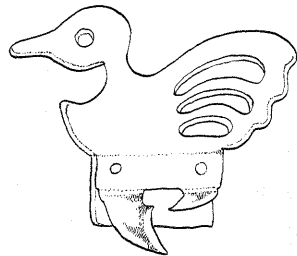
M そういふ公園の中で、お母さんたちが話しているときにその子は、自分の頭をたたきだけじゃなくってね、キーツとか、大きな声を張り上げる。

F もうやめてくれっていう叫びなのでしょうね。

M そうするととたんに周りの大人たちは、またキーツと振り向いて、この声はなんだというような、そういう雰囲気になるんですね。そうするとそのそばにいる私もな

んか周りから一緒になって変に見られているような気になって、もう本当に居心地が悪くなっちゃう。早く学校につれて帰りたいっていうような気にもなる。

でもその子は学校には帰らないでその手をうずめる、そして僕と一緒に気持ちの上のやり取りをしているっていうところでね、そこにとどまっていたんですね。それから何回か、いろんな公園に行つたときにもそういうことがあって、そのたびに僕はいたたまれない思いになりながら小さくなってね、「ああ、この子は今日はこんなに叫びませんように」とか、そんなことを心の中で願いながら、行つたときもある。だけどいま考えると、僕がそんな思いを持って一緒に行くときはやっぱりその子はそんなに楽しくなかったでしょうね。こっちも腹が据



わってね、その子と居心地がよく、過ごしたことが何度も何度も、それは楽しい思い出もあります。

F そうやって手をうずめてることは、自分自身を消すことと言っているのかしら。

M そう言っていないだと思ふの、それは。

F そうするとガンガン自分を殴ったりすることも、よく自傷行為なんていうけれども……ああいうことも自分の存在を否定してるような気持ちなのでしょうか。

M もうそれはね、こうやってつきあっていつて明らかです。そうやって手をうずめて遊んでるときには、自分の手で顔をたたたくことはやらないのです。それは僕は決してこうだからこうするとか、こうだからこうならぬなんていうように、因果関係の考え方は取らないようにいつも思っているけれども、この場合、同時にそこで起こっていることだから、自分を消したいということを手で表現していると、自分の顔を自分の手でたたたく、殴るといふようなそういうことをしないで、むしろそれ

を人との間のお互いの分かり合い、慰め合いというような、一緒に過ごすということになってくるのだと私は思っています。

F じゃあ、表現を育てることは、表現を受け取ることから始まるのかしら。その子の小さな表現をも受け取って、そしてそれを肯定する。

M それはその通りでね、その子がそうやってね、自分の苦しみなり悲しみなり悩みなりを表現してるんだから、それがその子のそのときの生き方なんだから、受け取るよりほかない。一緒にいる仕方っていうのは他にないんじゃないかと私は思う。

F そうですね。

M それがその子のそのときの生き方だからね。その子の生き方を受け取って、そして一緒にそれを共感するって言うってしまうとなんだか平ったくなる気がするけれど、あるときは一緒に悲しくなったり、一緒に怒ってみたいね。それから一緒にこう土の中にもぐりたいよう

な恥ずかしい気持ちになってみたり、そういうのが保育っていうことじゃないかということ、こういう子どもとの付き合いからね、とつても学びました。

F ジャあ今日はこのくらいにしましょうか。

M それでね、このことは決してね、障碍を持つてる子どもだけのことじゃないってことを付け加えておきたいと思います。私は長いことお茶の水女子大学の附属幼稚園に通っていたときにも、子どもが手をうずめるということに何度も出会いました。ある場合にはもつとはつきりとそれが見られるときがあつて、先生から叱られたときに、それも大して叱られたつていうわけじゃないんだけれどその子にとっては叱られたと響いたとき、その子は自分が遊んでいたシャベルを土の中にうずめた。それで僕が「あれ、ここに何があるんだ？」と言うとその子はうずめたシャベルを手でたたいて「ほら、あつた」と言つてシャベルを出してくる。で、またうずめて、で、またたたいて「ほら、あつた」。先生から叱られた後の

後ろめたい自分をうずめてるんだ、ということに何度も向き合つて、そうするうちに遊びをすることによつてその子はその後ろめたさから解放されて、その子は更に先に進んでいくことができたんだということを何度も経験しました。障碍をもつ子どもたちの場合にはそんなに簡単にその気持ちが消したとはならず、それがかなりとどまつていて、それをとどめながら今度は、保育者である自分自身が、どうやって立ち上がつて本當に向上きになつてその先を一緒にやつていくかつていうところにもまで自分をこなしていくかつてことがね、これが障碍をもつ子どもへの保育の、非常にありがたい点でもあり、また非常に難しい点でもありますね。また人に対して説明のしにくいところでもありますね。保育の中で学ぶこと、非常に大きなことですね。

F 分かりました。

その六



嶺村 法子

幼稚園の三学期、子どもたちは今までの経験を総動員して遊びを展開し、いろいろな形で力を発揮し、充実感を味わっています。私たちの幼稚園では、表現活動の総まとめとも言うべき「子ども会」をこの時期に行います。それぞれの学年に合った歌と合奏（楽器遊び）、劇（表現遊び）を保護者の方に見ていただき、全員の歌で締めくくります。

今年の年長組は、『ヘンゼルとグレーテル』を下敷きに、子どもたちと一緒に『お菓子の好きなうみ組探検隊』という劇を作りました。

春の遠足から、ずっと手紙のやりとりをしてきた魔女とカラス、展覧会の時みんなで力を合わせて作り上げたお菓子の家、運動会で演じた忍者、大好きなミニハムズ、憧れの妖精、そして元気いっぱいのおみ組の子どもたち。それらすべてが登場できるような場面をつなぎ合わせ、オペレッタ『おしゃべりなたまごやき』のメロディーに乗せて替え歌を考え、オペレッタ風『お菓子の好きなうみ組探検隊』ができました。

とはいえ、役柄も役回士のやりとりも毎日変わり、三十分も四十分もかかってやつと探検隊がお菓子の家にたどり着くということもしばしばでした。いったいどうなることかと思いつつ迎えた当日、『魔女が一人じゃかわいそう』と風邪で休んだ友達役をかって出る子あり、長くなりそうないきで機転を利かせて話を進める子あり、昨日までとは違う会話を考える子あり、どの子も実に楽しそうにお話の世界を楽しんでいました。

◆◆◆◆ TO・MI・KARA ひろは ◆◆◆◆

♪ある日カラスがやってきて

魔女の手紙をくれました

勇気があるならやってこい

お菓子の家までやってこい♪

みんなで歌って

いよいよ劇のはじまりはじまり♪

となるはずが…

毎回

誰が手紙を持つかで もめていたカラスたち

子ども会当日に

その手紙が紛失するというおまけ付き

始まる直前になって「手紙がない！」

大勢のお客さんの前で

冷や汗タラリ（担任）

急ごしらえの手紙を持って

「カアカア、魔女さまからのお手紙だ、カア」

やっと劇が始まった



◀「魔女からの手紙だって！」「何て書いてあるの？」

手紙を読んだ。うみ組探検隊

双眼鏡を首にかけ、肩にはバッグ、手に手紙

お菓子の家目指して、いざ出発！

♪お菓子が好き、お菓子が好き

ほくらお菓子が大好きさ

朝から晩までお菓子を

ムシヤ、ムシヤ、ムシヤ、ムシヤ

食べたいな、食べたいな

お菓子が好き、お菓子が好き

ほくらお菓子が大好きさ♪

『お菓子の好きな海賊』の劇中歌が

探検隊のテーマソング

憧れのお菓子の家目指し

歌いながら歩く、歩く…

森の中で疲れ果てて眠っていると

夜の妖精がやってきた

金銀に輝く星のステッキを

探検隊の頭上に振りかざす

「私たちは夜の妖精よ。魔女に負けない勇気をあげるわ。さあ、ゆつくり眠りなさい」

朝元気に目覚めて歩いていくと

忍者の修業に出くわした

♪修行を邪魔する子どもたち

一人ずつぶってやれ、パン！

威勢のいい忍者たちが道をふさぐ

「やいやい子どもたち、こんな森の奥まで何しに来た」

忍者に魔女の手紙を見せて説明すると…

「これは魔女の罠だ。食べられてしまうぞ」

「でもほくたち、どうしてもお菓子の家に行つて、お菓子をいっぱい食べたいんだ！」

「それじゃあ、コマの修行をしていけ！」

お盆の上で、切り株の上で

次々にコマ回しの技を披露する忍者たち

TO・NI・KARA ひろば

「コマを回せるようにならないと、ここを通
さないぞ。さあ、やってみろ！」

挑戦する「うみ組探検隊」

六人中四人がコマを回すことができ

「よし、通してやろう」

「これを持っていけ。きつと役に立つはずだ」
忍者から秘伝のコマを渡された

さらに森の奥へと進む探検隊

やってきたのは ミニハムズの国

ポンポンを持って踊るミニハムズたちは

お菓子の家に行くと言いつつ

「魔女はすごく頭がいいのよ」

「魔女を倒せるかどうか試してあげるわ」

「信号機クイズに答えられたら通してあげる」

「行くわよ。白、白、黒！」

「赤、黄色、緑！」

と次々クイズを出してきた



◀ フィナーレ、みんなで大合唱
♪ 可愛い魔女をやった、カア、やった

ト・ミ・カ・ラ ひろば

「雲、雪、髪の毛」

「トマト、レモン…、ピーマン」

つつかえながら なんとかクリア

「カアカア。お菓子の家に着いたぞ」

やっとお菓子の家に着いて大喜びの探検隊

ムシヤムシヤお菓子を食べていると…

♪だれだ、だれだ、だ・れ・だー

ワシの家をかじるのは

さあさあ、名前を言ってみる♪

こわい魔女が顔を出す

「ハハハ、まんまとだまされたな」

カラスたちは

暖炉に火をくべ大きな鍋に湯を沸かす

♪魔女さま魔女さま お鍋の準備ができました

魔女さま魔女さま お湯が沸きました♪

(トルコ行進曲のメロディーで)

魔女が鍋の湯をかき混ぜていると…

そこへすかさず探検隊

コマを投げ入れブンブン回す

コマ見て魔女は目を回し

鍋の中にざつぶーんと落ちた。

こわい魔女をやっつけて

めでたし めでたし

まもなく幼児期に別れを告げる子どもたちの最後の輝きの一コマを共に作り上げていく。それは、年長組担任の喜びであり重みである。

一人ひとりの成長と子どもたち同士の育ち合いに助けられ励まされて今日があり、今日を充実して過ごす中に明日への力が生まれる。そのただ中にいられることは保育者の幸せである。

(中央区立月島第一幼稚園)

みんな元気に生きている

徳野 雅仁

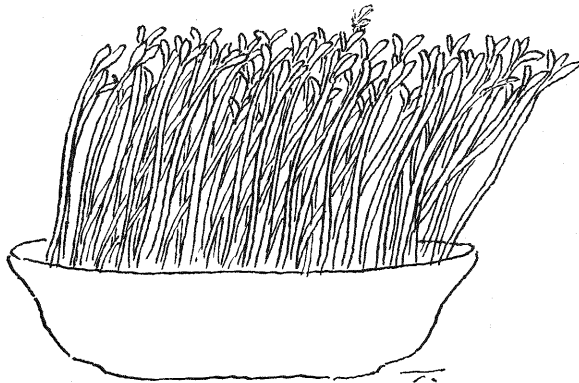
自然界には、ささいなことのようにでありながら、実に不思議なことがよく起ります。それは、室内のテーブル上で小さな器を利用して香り高いクレスのもやしをつくっているときでした。タネを密にまくと、発芽後、光を求めていつせいに白い幼茎を徒長させます。光を遮って発芽させ、幼茎が伸びたところで明るい場所に出し、子葉が刻々と緑色に変化する様子を眺めていたときでした。子葉の上には何かがいるのです。それは、一匹のアブラムシでした。いつ飛来したのか、なぜ、いるはずのないこの室にいるのか、不思議な思いにかられました。この室の窓は普段開けることはなく、庭に面した室からは廊下を経て、一番奥の室に位置しているのです。クレスの香りに誘われ、もし、庭に面した窓から入り、廊下伝いに飛来したとしたら。けなげに、そして、必死にクレスを求めて飛ぶ姿を想像すると、不思議な感動を覚えたのでした。

また、十数年前、謎めいた出来事がありました。それは、挿し芽用に口径十八センチの駄温半鉢を買い、やはり同時に購入した赤玉土を袋から直接入れ、窓際の手すり上部の角に板をあてがい、その上に置いた鉢内で起きました。結局、挿し芽は行わず、翌年秋まで放置し、畑にまいたサヤエンドウの残りダネをこの鉢にまいたのでした。赤玉土だけですから、どう育つかの確認です。発芽したサヤエンドウのツルを、手すり物干し竿を

結んだ紐に誘引しました。弱々しくも美しいツルを伸ばし、僅ながらも収穫を得ました。一、二カ月後、枯れたツルを刈りとっていたところ、突然、太いミミズが顔を出し、一瞬のうちにUターンして鉢土に滑り込んだのです。我が目を疑いました。外部から侵入することは全く考えられず、新しい鉢に未開封の乾燥した赤玉土のみを用いた状況を考えると、大きなミミズの存在は何とミステリアスなことでしょうか。

野菜づくりをしているとこのように、思いがけないことがよく起こります。転居した新しい庭で、栽培を始めた年のことです。笹藪跡の岩盤状の土を砕き、急遽、乾燥鶏フンと油カスを施してトマトを数株植えました。そのうちの一株が梅雨明け前に青枯れ病になり枯れ落ちました。土壌伝染性の病害が発病した株はただちにとりのぞいて焼却し、土壌消毒を勧める声が多いなか、この株の茎を地際十センチを残して刈とり、根を洗い、庭の隅の無肥料地に植え込んでおきました。しばらくして、秋まきの準備のため草を刈っていたところ、株元から新しい茎を伸ばし、元気に育っているトマトを発見したのです。無残な姿で倒伏し、回復不可能と思われたトマトが見事に生き返った不思議な出来事を目のあたりにし、つくづく未知なる生命力の確かさに感心したのでした。

(イラストレーター イラストも筆者)





三木成夫といのちの世界

吉増 克實

(五) 母なるものへ

いのちの世界

三木成夫はいのちの世界への案内人です。そしていのちの世界は、こころが動かされることによって見いだされ、こころが目覚めていくにつれて拡がり深まっ
ていく世界なのです。解剖学者としてヒトのからだの
研究から出発した三木の関心は、次第に脊椎動物の系

統発生、無脊椎動物との比較、植物を含む生命の世界へと拡がっていきました。そしてそれはさらに自転しながら太陽の周りを回る地球が生み出す四大リズムと植物や動物のいのちの波が示す生命リズムとの交響的
連関にまで拡がっていったのです。

同じような関心の展開を見せた人に今西錦司がいます。今西は今日のサル学など動物生態学の基を築いた

人です。彼は自然界の全体的なあり方への関心にも終生導かれていました。そして、種という概念は種個体を集めただけのものという一般的な自然科学的な見方に対して、種の棲み分けという事実を発見し種社会というものが存在することを示しました。進化についても個体の変化を進化の動因とするダーウイン以来の考え方に対して、種の変化が個体の変化に優先すると述べて、独自の進化論を提唱しています。今西によれば個体を越えて種社会（スペキア）が、さらには生物全体社会（ホロスぺキア）というものがあるといえます。生態学には、土地の気候風土の密接なつながりをもつ動物相（ファウナ）や植物相（フロラ）という概念もありますが、生物全体社会という考えはこれらを包含するものです。それはさらにラブロックによって提唱されたひとつの生き物としての地球（ガイア）という見方にもつながるものでしょう。

極性連関する全体

前回到述べたところの発達という観点からのちの世界の拡がりとその特質をあらためてみてみることにしましょう。わたしたちはところが目覚めるにつれ、自分自身をひとつの生命的共感中心としながら、さまざまな共感的全体に所属していることが体験されてきます。共感的連関は全体と部分とであれ、部分と部分とであれ、すべて極性的連関にあります。この共感性は次第に拡がっていくときもそれぞれの個体的生命の生命的個性を反映した個性を失うことはありません。まず、人間的な活動と直接関与する段階だけを考えてみましょう。前回到述べたところの発達の記述と重なるように思われるかもしれませんが、受けとめるこころの側より開ける世界の側に重点を置いているつもりです。

まずは無条件で愛してくれる母親の愛情に対する受動的な安心と満足の体験があります。母が最初の世界ということになりますが、ここですでに母と子という

二者による全体的連関が現れます。この母子関係は本来的に個性的です。つぎに自分が積極的な愛し手になり相手とのあいだに共感や信頼感を結ぶ二者間の共感的連関があります。そこにも友人関係であれ、恋人同士であれ、夫婦であれ、二者を包む全体的連関があります。これらはそれぞれ共感中心の生命的個性を反映します。次にはこれらの連関を内包した上での、共感的共同体があります。人間的な共感的共同体の範囲では、家族、(学校、職場)、生まれ故郷、そしてさまざまな次元の文化的民族的共同体があります(たとえば東北地方、日本、東アジア)。わたしたちにとってこれら人間的な共同体も基本的には運命的なものです。運命的というのは生まれると同時にその世界の一部と

なり、それを選んだり変えたりすることはできないという意味です。わたしたちは親を選ぶことも生まれ故郷を選ぶこともできないのです。

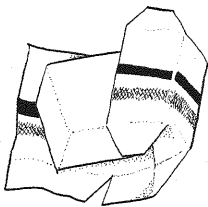
わたしたちはさらに人間的社会的な共同体より大きな共同体的全体と運命的に連関しています。わたしたちはヒトとしての種社会に属しています。それがヒューマニズム(人間中心主義)の母胎ともなるのです。さらに動物界に属する一員であり、さらに植物も含む生物全体社会に属してもいます。生物全体社会に対する共感的共同体体験が目覚めるときに生きとし生けるものみな仲間という共感体験が生まれるのです。さらにわれわれは地域ごとの動物相や植物相を含んだ気候風土の一部でもあれば、そのまま生きとし生けるものを育む水と大気の星、地球の一部でもあります。それだけではありません。地球の一部であることは、地球と月、さらに地球の属する太陽系という宇宙的連

関に属することでもあります。地球の上で繰り広げられる、動物や植物のいのちの波、食と性と営みは、月による潮汐リズム、太陽の周りを回ることによる四季のリズムと密接なつながりをもつことはすでに述べました。最後にわたしたちは時間と空間という宇宙的連関に編み込まれているのです。

全体性に注目するときには、これを個体生命の全体性を出発点にしてその部分との極性連関を見ていくこともできます。小宇宙としての個体生命という全体性に部分として極性連関するのは個々の臓器です。この臓器を全体とすると次には細胞という部分が次の全体になります。そもそも細胞は単細胞生物ではそれ自体が一個の生命としての全体性を示しているのです。細胞に対して細胞内構造物も部分として極性連関を示すと言えるかもしれません。細胞内構造物、たとえばミトコンドリアはかつて独立した生命体であったといわ

れています。それは核とは別に独自の遺伝子をもって居るのです。最初の真核動物は、原核動物の共生によつて生まれたとリン・マーギュリスという生物学者は述べています。彼女もまた三木と同じくヘッケルの生命観に共感を示している学者者なのです。さらに、生命的全体性から離れても、さまざまの分子、さらに原子、そしてまた素粒子すら、それぞれの全体性を示していると言えるでしょう。

世界は質を異にする何層もの全体性の分極構造をしているということになります。種も、双葉も、それぞれに完全な全体性を保持しています。それらは不完全な花でもなければ、不完全な実でもありません。生命は成長のどの段階でも完全な全体を保持しています。

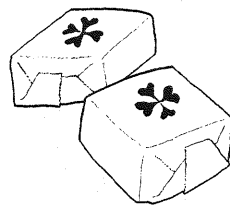


そしてそれぞれの全体性がひとつの意味として現象しているのです。そもそも多細胞生物の生命史は、それが中心をもった一個の小宇宙となる全体化の完成への過程とさえ見られるのです。

体験構造の年輪

これらの連関がどれほど運命的なものであるかは、この連関のすべてがわたしたちの体験構造に刻印されていることから明らかです。共感性の拡大で見た方向とは逆に、体験構造の年輪を見ていくことにしましょう。まず、わたしたちは時空に織りなされていきます。わたしたちは決して部屋から出るように空間の外にでることもできなければ、川岸に立って川の流れを眺めるように時間の流れを眺めることはできません。それはわたしたちが時空そのものだからなのです。この時空性の体験が第一の年輪です。わたしたちは宇宙

太陽系の一部として、岩や土塊と同じく引力の作用を受けています。そして太陽からの熱と光なしにはわたしたちの生存はもちろん、地球の生命史はあり得なかつたことでしょう。引力と



光の受容が第二の年輪です。そして地球から生まれたものとして、わたしたちは水と大気なしには生存できません。そのようなものとして生まれたのです。植物と動物の営みは太陽と地球と月と密接なつながりがあります。わたしたちはまた生命のもつとも基本的な特質として植物とともに栄養と生殖という植物性生命過程を分かち合っています。そしてこれを実現するためにはほかの動物とともに感覚と運動という動物性生命過程を分かち合っています。ところが目覚めた人間はさらに共感と表現といういのちのはたらきを共有してい

ます。

これら体験構造の年輪が示しているのは、ただ受容するよりない運命的構造なのです。どれほど深く実感されるか、共感的に受容できるかどうかは別にして、これだけのことからも、わたしたちが宇宙から分化した宇宙の一部であることは全く疑いようのない事実であるといわなければなりません。それは決してロマン的夢想の産物、文学的比喩ではありません。時空性をもっとも基本的特質として、何重にも極性分化を繰り返す、そのたびに新たな質性を帯びて現れる世界に、共感中心としてのわたしたちはそれぞれの個性的共感性を通じて出会うのです。この世界のできごとはいずれも唯一性という刻印を押されています。世界は個性的なものに満ちあふれています。見渡しがたい多様性の世界、それがいのちの世界です。

あたまのはたらきとはこれらの多様な個性、質性を

無視する能力です。それを抽象といます。そして初めて同一のものが生まれ、同一のものが生まれることで数えたり計算できる数と量の世界が生まれます。もの世界が生まれるのです。そこにはもちろんいのちもここもありません。

根源のリズムといのちの再生更新

いのちの世界のもうひとつの、そしてより根源的な特質があります。それはこの世界という全体的連関が脈動しているということです。世界は時とともに絶えず間なく変わり続けています。世界には変化を免れていないものはひとつもありません。わたしたちのここからだも、世界と連関しつつ変わりながらその意味を体験しているのです。そして時間はただ一方にだけ、現在が次々に過去になるといふうに現在から過去に向かって流れていて、逆向きになることは決して

ありません。世界の出来事はすべてたった一回きりの出来事として生起しているのです。あたまで時間を無視し、質性を無視するときに、同一の出来事の機械的反復が生まれ、また反復可能な概念とものが生まれるのです。

しかしまたこの変化する世界は、そして世界の連関するすべての部分は、それぞれに同一ではないが同じような現象を、機械的な周期ではないが同じような間隔で繰り返しています。類似の現象が類似の感覚で生起することをリズムと呼ぶのです。夜が明けて朝になり再び夜が訪れて一日一日が過ぎていきます。しかし今日は昨日とは同じではありません。一年がたてばまた春がやってきますが、今年の春は去年の春とは質を異にする新たな春であることは言うまでもありません。子どもは親に似ているけれど親そのままではありません。連関する世界のもろもろの部分はさまざまの

リズムを奏でています。四大リズムと生物リズムの宇宙交響と三木が呼び、ヘラクレイトスガパンタレイと
いったものです。

たとえば、地球の上のすべてのものは地軸をめぐって周行し、また地球とともに太陽をめぐって周行しながら何重ものらせんを描いています。周行の円環軌道には始めもなければ終わりもありません。終わりはまた新たな始まりになります。地球上のすべてのものは周行を繰り返しながら過ぎた時間の分だけ新しい質性を獲得し更新されるのです。いのちの波、世界のすべては周行しながらせんを描き、脈打ちながら再生更新されます。始め



も終わりのない円環軌道が時間的に展開されてらせんになり、周行するたびに質を変えて脈動する再生更新になります。世界は、つまり時空は、脈動しながら再生更新を繰り返しています。もつとも新しい現在には、劫初以来のすべての過去が再生更新されて現れています。そのようにして、わたしたちの現在の肉体にも、生命のあらゆる過去が現れているのです。

いのちは食と性の波に乗って絶え間なく再生更新を繰り返しています。わたしたちのいのちは太古の地球の海で生まれた原初の生命球から絶えることなく今日まで再生更新を繰り返してきました。地球はあらゆるいのちの母であり、海はその子宮であつたのです。いのちは親から子へと再生更新されます。生命は生殖を通じてつぎつぎと新たな個体へと受け継がれ、そのつどもう一度生命の記憶をたどり直しながら再生更新されるのです。文字通り、子は更新された親であり、再

生更新された原初の生命なのです。そして次代へのいのちのバトンタッチを終えた個体は母なる地球へと帰っていきます。大地母神はすべてを産み出す豊饒の女神であるとともに、すべてを取り戻す冥府の女神でもありました。「命」という漢字は、天から与えられた贈り物を受け取る人の姿を表わしています。母なる地球から与えられたいのちは、また母なるものに返さなければなりません。三木はこのような個体の死を、元祿の俳人宝井其角の「蠅螂の尋常に死ぬ枯れ野かな」という句を引いて「尋常の死」と呼びました。

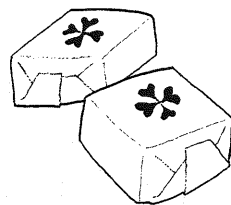
母なるもの

前に述べたとおり、三木は植物における成長繁茂の相と開花結実の相との交代、動物における食の相と性の相の交代に生命のもつとも根源的なりズムをみて、それをいのちの波と呼びました。それは無性生殖と有

性生殖との交代でもあります。そしてこの交代は単細胞生物の増殖相と接合相の交代から、わたしたちヒトの体細胞の増殖による成長と、減数分裂した性細胞の受精にいたるまで変わることはありません。無極の相と分極の相とが交代しています。

三木は『胎児の世界』（中公新書）の最後に老子の言葉を引いています。「物あり混成し、天地に先立つて生ず。寂兮（ケイ）たり寥兮（ケイ）たり。独り立つて改わらず、周行して而も殆（つか）れず、以て天下の母為る可し。吾其の名を知らず。之に字（あざな）して道と曰う。強いて之が名を為して大と曰う。大を逝と曰い、逝を遠と曰い、遠を反と曰う。…」（二十六章）。天地への分極に先だつ無極の大なるもの、そこから分極した生命が周行し再び帰ってくるもの、それを母と呼ぶというのです。これをクラークスは母たる無極のカオスと分極するコスモスと呼んでい

ます。「万物、並び作（おこ）るも、吾は以て復るを觀る。夫の物の芸々たる、各おのその根に復歸す。根に歸るを靜と曰う、これを命に復すと謂う」（十六章）。これは成長繁茂、



開花結実ののち大地へと歸る植物の生命の周行を述べているのだと言います。再生更新される生命の中心には大いなる不動の母がいます。すべての母は大いなる母の分身です。土地土地のうぶすな神は、同時にまたひとつの大地母神です。それは限りなく変身を続けながら、ひとつであり、またすべてであるものです。私たちは単数なのに内容的には複数である言葉、つまり言語学でいう「絶対単数」で表わされるものがいのちの世界なのです。

三木の胎児の世界は同時に母の世界です。母と子は

どちらも生命の周行の最後にある完成された生命の無極の姿であるといえます。大人の男女への分極は、むしろ、新たなる完成への途上にある姿であるというのです。

三木は毎年、藝大での最後の講義の時間に学生たちに胎児が母親の胎内で聞き続けたであろう母親の心臓の拍動する音、脈打つ血流音を聞かせていました。自分の母親の死からしばらくして訪れた伊良湖崎の海岸で、流木を集めつながら波打ち際を歩き来する三木が聞いていた潮騒の音は、ここに呼びかける大いなる母の声に聞こえたにちがいません。

『胎児の世界』はこう締めくくられます。「浜辺に打ち寄せる潮騒の響きは、いつしか意識の表面から消え失せていた。時に高く碎ける音にはっと我に返るのであるが、それも束の間で、ふたたび意識の表からそれはかき消されていく、わたしは黒潮のころとそこで

一体になっていたのだ。いやそれよりもっともっと大きい母なる海のころと完全に解け合っていたのであろう。いうなれば、人類の生命記憶の故郷に、わたしのころは、いつとき里帰りしていたのである」。

三木成夫は生涯にわたっていのちの世界について語り続けました。そして今なお残された数少ない著作を通じて、またその魅力的な言葉によって、いのちのふるさとへと帰るようにわたしたちのころに呼びかけてくれているのです。

(東京女子医科大学第二病院)

私の体験した

半世紀前の日本とアメリカの保育

亀高 京子

幼稚園の先生になって

終戦直後に卒業して最初に勤めたのは母校の附属幼稚園だった。級友の殆どが高等女学校から学制改革による新制高校勤務だったから、少々とまどいはしたが嬉しかった。

私のお話に目を輝かせる子ども達。女の子のお気に

入りは七匹の仔山羊と赤頭巾ちゃん、狼の声色に“コワイ”と言いながらも繰返し希望する。男の子は私の創作“ケンちゃんの冒険”に歓声をあげてくれた。小さい時からサボッてばかりいたピアノも、歌の伴奏は何とか弾けたが、不得意のお絵かきは上手な保育実習生に全面的にお願いした。

“ありさんとありさんがこっつんこ”の歌がリスさん

から象さん、○ちゃんと△ちゃんと拡がって大はしゃぎだった。

お庭で蟻の観察に夢中の二人、「ほら、こつちにも穴があるよ」「小さい方はお勝手口なのよ」「そうか、そいじゃこつちがお玄関だね」と納得の笑顔。

幼稚園のお山に先生達で馬鈴薯を植えていた。その一つを植木鉢に埋めてお部屋におき、「芽が出て大きくなったら土の中にお薯が出来るのよ」と言ったが、まだかまだか？ と毎日のように誰かがそつと掘ってみるので育たない。家で植えて芽の出たのを月曜日の朝早く交換しておいた。みんな大喜びで見守り、夏休みの前日に収穫できた三粒は貴重品だった。

少し離れたところで「昨日ね、お月様が僕と一緒に歩いたんだよ」の声、思わず耳をそばだてたら、「ちがうもん、僕達の方に来たんだよ、ね」と、同じアパートの二人組が優勢だ。その時、中学生のお兄さんがいる物知り博士の宏ちゃんが「どつちもいいんだ

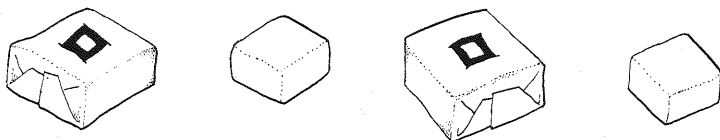
よ。そのわけはね、難しいから中学生になつたら解るよ」の裁定に何となく収まった。宏ちゃんは経験ずみだったようだ。私は稔まじを二つ使つて説明しようかとも考えたが、昔の自分と重ねて、そつとしておきたかつた。

毎日、自分の子ども時代が再現されてるようだったし、子どもの個性に目を開かされた。

子どもと同じ視点でと、しゃがんで植物を観察することや、健康状態の把握も学んだ。

新米の私を信頼しての内緒話や「僕のおよめさんになってネ」と懇願されたりもした。

教職生活最初の担任だった林の組



の三十八名は、ほんとうに可愛かった。ひとりひとりの『くせ』まではつきりと覚えている。

子ども達の成長とともに私も大きく成長させていた。感謝でいっぱいである。

アメリカのナースリースクールで

一九五七年、夫がカルフォルニア大学デビス校に研究留学することになり、三歳になったばかりの長女を連れて同行した。

夫の師であるドクター・クライバーの夫人のメアリーが、私の履歴書を見て、一年間の滞在に最適と思える二つの案を示してくれた。

その一つが、夫人（元家政学部児童学科教授）の発案で設立されたナースリースクールへの母子どもの参加である。先生一人と助手、家政学部、保健学部出身の母親達との共同保育である。子どもは月々金の毎

日、母親は一ヶ月に一週間、六人のグループで三十六名の三、四歳児の保育にあたる。隔週水曜日の夜に先生と母親全員でミーティングを持つ。

父親も一ヶ月に一回の土曜日に園舎の補修・庭の整備の役割というシステムである。

保育の基本は、十年前に勤めていた附属幼稚園と共通していて懐かしかった。手を洗うこととサンキュウの躰以外は大らかである。

十時に、牛乳、オレンジジュース、水とクラッカーが用意されるが、ひとりひとりに何を選ぶかを言わせ、配ってくれる人へのサンキュウを忘れると注意される。シャイで泣き虫だったまち子も二週目には慣れて、ミウク（牛乳）、ワーラー（水）、オレンジジュース、サンキュウと、ハイイ（お早よう）、バーイ（さよなら）だけで、支障なく参加できた。

お絵書きは、一人前の画家のように画架にかけたカンバス（紙を張って）に、筆と水彩絵具で自由に描か

せる。その時、衿をはずし袖を短く切った大人の古ワイシャツを後前に着せて、後を洗濯バサミで留める。在籍、卒園児の親が洗濯した古ワイシャツを大籠に入れてくれるから山のようにあった。

お砂場では、様々の型につめて抜いていた子どもが、まち子が両手でつくるお団子を真似すると、僕も私もと次々に熱中した。

金髪の子はそれほど多くなく、茶色、灰色、黄色の中で、まち子の黒髪は目立っていた。

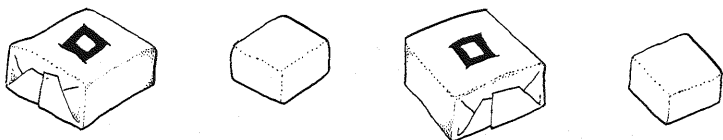
子どもの適応力は強い。私の英会話は一向に上達しないのに、半年もすると、まち子は友達との会話に不自由しない。子ども達は何の違和感もなく、マチーコと呼んで仲良しだ。子どもに国境は無いことを痛感・確認した。

メアリーの提案は大成功だった。子どもを通して家族ぐるみの交際の輪が拡がり、ピクニック、会食、レシピの交換など国際交流へと進展した。いずれも堅実

で家庭生活を大切にしている人達だった。アメリカの生活様式は、新環境との相互作用の中で、ヨーロッパ各民族の既成文化を容れさせたが、それでも各家庭には祖父母の出身地の家政理念が生活慣習・家庭教育に片鱗を残していた。

私共の経験は、大学町という特殊性、四十余年前の良き時代のアメリカだったからかも知れない。広大なアメリカの中の豊かな自然環境と良識ある人々で構成する学園町（市）！ たった一年余の生活だったが楽しく有意義だった思い出は盡きない。

（元東京家政学院大学）



実践の心を学ぶ

—堀合文子先生の実践ビデオから—

関口 はつ江

急がれる実践の改善

今、保育の場合は、園児減少や親の変貌、子育てコストの削減のための行政施策など、社会的な波を乗り切ること追われている観があります。保育の専門的役割も広がり、高度な知識をもつ保育者への期待もあります。

しかし、最近痛感するのは、激変する生活環境によって子ども自身が大きく変わってきている時であるにもかかわらず、保育の周辺や理論は語られても、子どものかかわらずに、保育の周辺や理論は語られても、子どもの状態（特に内面）の実際が語られず、今の保育が子どもの発達のニーズに合っているのか、子どもとの接点での細かい保育者の行動がこれでよいのかとの具体的な問題や方法の問い直しが少なく、過去の保

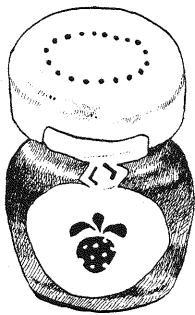
育の一般論による方法が踏襲されていることです。保育は実践ですから、いくら理論があっても、それが対象に應じて的確に具体化され、子どもにも効果がなければ何にもなりません。「保育はこうあるべき」、「こういうことをするのが保育」という固定化、形式化された考えが保育者の行動を縛り、自分の目で見、子どもの気持ちに触れて感じたことから発した行動が抑えられ、理屈に照らした行動が優先するとすれば、子どもと保育者の生活は交わらず、子どもも保育者も「共に生きた」保育ではなく「何かをこなした」にすぎなくなります。

本来子どもにも最も敏感なのは日々子どもとかかわっている保育者です。目の子どもに即して優先すべきこと、有効な方法などは、保育者が保育行為をしなから直接掴み、経験として蓄積されます。それは研究者による客観的研究とは異質な、それに先立つ実践のための最前線の貴重な資料です。優れた実践の中で確かめられていることを、実践者が行為レベルで共有する

ことが保育の改善のためにことのほか重要で、若い保育者の保育実践家としての保育力の低下が懸念される昨今、経験者から保育の奥義が伝わらないことも一因かと思われれます。

堀合先生の実践ビデオから―発想を変える―

「保育者」はまずどのような心がけで子どもに向かい、子どもの何を捉え、それをどのように考え、どう対応して保育を作り上げているのでしょうか。「堀合文字先生の保育実践ビデオ」はそれを伝える目的で作られました。堀合文字先生（元お茶の水女子大学附属幼稚園教頭、現十文字幼稚園主事）は倉橋惣三先生の教えを受け、それを実践で示しつつ保育者として六十



年近く第一線で活躍、積極的に啓蒙活動もされています。そこから学べることは尽きません。堀合先生が常におっしゃる言葉は「今年の子どもは昨年の子どもとは違います」「保育者が変わらなければならぬのです」ということです。この二つのことは誰もが知っていることですが、それがどう実際化されるか、それによって子どもがどう育ってくるのか、保育場面の映像とテロップの質問に答える形で先生ご自身の解説で示しています。堀合先生担任の幼稚園三年保育クラスの成長過程を追い、主要な場面での保育者の意図や背後にある考え方を説明します。年少、年中組は五月と十一月の二本、年長組は五月、十一月、三月の三本（各約五十分）にそれぞれ一日の生活を映し出す計画で今、二年目制作中です。

先生の保育は、子どもの「今」に応じる際にその時のことだけでなく、瞬時に前の経験、後の発達を考える深さがあること、活動へのかかわりや手のかけ方は子どもの細かい観察抜きではしていないこと、一つの

原理的な発想の具体化は相手によって微妙に変えていることなどが映像と説明から捉えられます。さらに、実際の動きと説明の関連について視聴者が考察をすれば、保育者の意識と行為への現れ方の間についての洞察も可能になり、保育行為の理解へと一層進めることもできましよう。このビデオの利点がここにあります。

幾つかの場面を紹介します。

三歳児保育の鍵

「先を見通す」

* 子どもの身支度を丁寧に手伝う先生……

文字「なぜ、自分のことは自分でさせないのでですか？」

昔はやって貰いましたが、今はそのような表面的な要求よりも、その子のもっている能力を出して使えるようにするために穏やかな雰囲気、安定出来る場所にしなければならぬのです。やって上げることの意味にはいろいろなことが含まれています。私がやって上

げると一年後には黙っていても自分でやる。しかも正しく。今やりなさいといって任せておくと、三歳なら三歳のレベルですからちゃんとやらないでしょ。

* 遊び場面の散らかった遊具をまとめたり、動かしたりする

文字「遊具を手まめに片づけていますが？」

その方がよく遊びますし、将来大きくなった時に散らかっていても平気であるようでは困るから、そういうことも考えています（写真1）。

* 子どもが描いたお面を切り、ベルトをつけてお面にし、頭にかぶせてやる

文字「お面などをよく作って上げていますが？」

三歳児の今、仕事を上手にしてくれることは望んでいません。私が作ってやった方が後でやってくれることが分かっていますから。今は要求を入れて上げることが大事。それと作った物で遊ぶこと。今は遊んで欲しい。仲良く遊んで欲しい。将来は考えて遊んで欲しい。それに必要な物は作って上げましょうということ



▲写真1 遊具をまとめる

になる（写真2）。

「子どもを見る」

* お弁当箱を自分でかばんに入れたのに、先生が取り出してやり直しをしている

文字「お子さんが自分でやったことを先生がやり直していますか？」

袋に入れないでかばんに入れたでしょ。本人も何か変と思っているのか少し躊躇してましたよね。自分で袋に入れてかばんに入れた時は、それが下手でもやり直しはしません（写真3）。

* 男の子が盛んにけつたりポーズをとって戦いごっこをしているが、先生は所持品の始末などをしている文字「戦いごっこへの注意は？」

見えないように見えますが、私は相当によく見えます。ひどいときには『それはちょっとやり過ぎね』と注意します。やらせっぱなしだとひどいことを平気でやるようになってしまいます（写真4）。

* 先生は遊びに入らないのですか？（砂場、積木など



▲写真2 おめん作り



▲写真3 お弁当のかたづけ



▲写真4 戦いごっこ

子どもの遊びのそばには行くが中には入らない)

それはこの頃、今年からです。入園した時どんなお子さんか数日間よく見ます。そこで、あまり遊びに入ってはいけなと思います。みんながこつち向いて「どうするの?」というような子達であると気づいたから。今年言葉は相当にとりました。今は音や話が氾濫しているから子どもの中に入っているし、受け身の立場が多い。私がある上にああこう言ったらますます受け身になるでしょ(写真5)。

(十一月ビデオの子ども達は友達同士で本当によく遊び、生活習慣も出ています)

子どもの生活が深まるには

このビデオの保育場面では、保育者は大人として自然に振る舞い、子どもは自分たちの世界を安心して展開しています。大げさなこと、不自然に感じることはありません。子ども達は自分たちの遊びに打ち込みます。それは保育者が全神経を使って、今のこの場にい



▲写真5 すべり台での遊び

る子ども達に気配りをしていながら、子どもに向かつては穏やかなことばと素早い反応をして、子どもへの心の負担をかけない保育をしているからでしょう。

「三歳の時に相当に細かいところまで考えています。

それは一学期も二学期も同じです」と言う、締めくくりの先生の言葉がすべてを表しています。子どもの行動や状態をすべて自分に投げかけられたこととして受け止める「場を担う意志」、保育者に差し向けられた思いやその表現へのよりよい応え方を模索する「探求心」、保育者自身の行動を子どもの側にたつて適切にコントロールする「理性と努力」、保育者自身の調和的な「生活観、発達観」などが先生の動き、視線、表情、言葉などに表れていて、画面を通して伝わってきます。

プロのカメラマンが捉えた実際の一日をそのまま編集していますから、保育にかかわる様々な立場の方が討論し合う余地もあるビデオです。

最後に津守真先生（お茶の水女子大学名誉教授）の

推薦の言葉を一部引用させていただきます。

「堀合先生のクラスには私はお茶の水女子大学時代を通して殆ど毎日通っていました。どの子どもも心から満ち足りて一日を過ごすのを見て私自身も満ち足りて研究室へ帰るのが常でした。（中略）先生の保育は一人一人に応えるものですから、子どもが変われば先生の保育も変わります。しかも、どの子どもも精一杯遊ぶという点では共通と言えます。今なお、少しの気のゆるみもなく、同じように保育を続けておられる姿に励まされます。（後略）」（鶴見大学短期大学部）

堀合文子先生の保育ビデオ

三歳児編 二本完成販売中 四歳児編 二本十五年二月完成予定

五歳児編 三本次年度予定

制作 実践保育研究会（東京都豊島区雑司ヶ谷一―二十五―

一 雑司ヶ谷幼稚園内）

問い合わせ先 ○三―三九八七―三五三七

編集後記

昨年の夏、会津地方に伝わる昔話を語る方たちを訪ねました。

福島県では一昨年の夏に「うつくしま未来博」という万博が行われ、「からくり民話茶屋」という芽茸きのパビリオンで、福島各地に伝わる民話が語られました。この企画のために、各地で語り部スクールが開かれ県民の中から語り部が養成されました。

私たちが訪ねた南会津の大内宿では、芽茸きの民宿の囲炉裏に火をおこして、近所の老人会の語り部スクールの出身者の方が集まって下さり、「嫁の尻」「茶売り金三郎」などの南会津に「ざっと昔（ずっと昔）

から伝わる昔話を聞くことができました。

その後、その人たちが昔話を聞いた子どもの頃のこと話題になりました。秋冬毎晩毎晩、囲炉裏端で二人一組になって、たばこの葉を広げる仕事を手伝っているときに、子どもが眠くならないように、大人が代わる代わるしてくれた昔話を聞いて育ったというSさん。頭のシラミを取ってもらいながら、母親のひざで昔話を聞いたというTさん。そこでは、手を使うリズムにのって、昔話で自分のことばで語られていることに気づきました。

私はいままで、語りは上手な語り部からもっぱら聞くもの、と思っていました。今回、語りは語る者と聞く者が、リズムや一体感を共にする体験なのだと思います。(A)

幼児の教育

第一〇二巻 第二号

(二〇〇三年二月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」をお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

好評発売中！

編集委員 森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女靈峰（淑徳大学教授）



21世紀保育ブックス⑪

保護者の要望をどう受けとめるか 苦情解決・第三者評価に求められる保護者への説明責任

小笠原文孝 よいこのもり第2保育園

延長保育、休日保育、夜間保育など、子育て支援として園が果たしている機能は、依存性の強い親にしていこうと、決して同義語ではないのです。「子育て支援」とか、「共に育児を考える」ことの根底には、園側の説明責任と応答責任、そして行動責任をもつことがあります。そして親自身が社会的自己責任を獲得して、それを双方が認め合う上に成り立つものだと言えます。園と保護者とが共に育ち、支え合う方法を探ります。

B 6判 168頁 定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス⑫

保育所と幼稚園～統合の試みを探る

吉田正幸 幼児教育21研究会

保育所と幼稚園は、同じような年齢の子どもを教育・保育する施設であることから、かなり以前から一元化が言われてきました。福祉的な要素の強い保育所であっても、教育的な要素の強い幼稚園であっても、子育て支援の機能をどう持つかという点では共通しています。言い換えると、子育て支援という枠組みにおいて、保育所と幼稚園の垣根はほとんどありません。つまり、より大きな意味があるのは、保育所や幼稚園の施設ではなく、そこで発揮される機能なのです。すなわち、保育の理念に行き着きます。本書では、これまでの一元化の試みと、これからの多元化・統合への道を探ります。

B 6判 208頁 定価：本体1,200円＋税

既刊本

- | | | | |
|-------------------|--------------|------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 | ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女靈峰・山本真実 共著 | ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 | ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 | ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 | ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレール館

0・1・2歳児の子どもたちが毎日潤いのある生活を送れるようにするための保育実技シリーズです

乳幼児を迎える保育室の環境
づくりのヒントが満載!



0・0・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ 1

笑顔がいっぱい

わくわく保育室

- ・乳幼児のためのかわいい誕生表、保育室を明るくする壁面飾りのアイデアを数多く紹介しました。
- ・保育室をすてきな空間に変える生活環境便利グッズの数々には、牛乳パックで作る「みんなの帽子入れ、キルティング布を使った「遊べるおむつ替えマット」、段ボールと布の「どこでもまど」など、身近な素材で簡単に作れるものばかりです。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵 編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円+税

0・1・2歳児が喜ぶ、手づくり
おもちゃ・プレゼントのアイ
デアがいっぱい!



0・0・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ 2

げんきわくわく

手づくりおもちゃ・プレゼント

- ・感触のよさやなめても安全なもの、洗濯のできるものなど、乳幼児のおもちゃが備えなければならない特色と“手づくりのよさ”を生かしたおもちゃ・プレゼント・誕生カードのアイデアを多数紹介しました。
- ・おもちゃを手づくりするには、時間も手間もエネルギーも必要ですが、工夫する楽しみ、完成の喜び、子どもたちが手にして喜んでくれる姿を見るとき満足感は、それらに費やした苦勞を吹き飛ばしてくれます。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵 編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円+税

キンダーブックの
フレール館